
キミは太陽

karinko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミは太陽

【NZコード】

NZ8607Z

【作者名】

karinko

【あらすじ】

東京から転校してきた内気な少女、菜ノ花。
いつも笑顔で、かなりの天然な少年、光。
しつかり者で少しきついが素直な少女、恵美。
いつも冷静だが、優しい少年、悠人。

4人の高校生活を描いた青春物語。

プロローグ 菜ノ花side

10月の終わりごろ。

少しずつ冬の足音が聞こえてくるような、そんな季節。

太陽みたいに明るい、キミに出会った。

私は笹川菜ノ花。

一週間ほど前、とある事情で東京の高校から大阪の高校に編入してきた。

…入学して一週間がたつのに、まだ友達がない。

…というのも、（自分で言うのも悲しくなるけど…）私がすごく人見知りが激しくて、内気なことが原因

だ。

今は下校時刻。

「はあ…」

私は小さくため息をつくと玄関をでた。

ふと、ガラスに映った自分の姿を眺める。

そこにあるのは、メガネをかけた地味で暗そうな女子生徒。

更に深くため息をつく。

私はうつむいて、とぼとぼと歩き始めた。

ちよつと運動場の前を通り過ぎようとした時。

ドンッ！

何かに押されて、体が後ろに傾いた。

突然のことだったので支える間もなく、地面に尻もちをつく。

何が起つたんだろう？…そう思つて顔をあげると、

「『めん…』…」

男の子が、心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

どうやらこの男の子とぶつかってしまったからしい。

…あれ？…見たことがある顔。

「…え、…」

私はそう言いながら男の子の顔をあらためて見た。

明るい栗色の髪。

大きな猫目。

服装から男の子と判断したけど、女の子だと思えばそう見えないこともないような中性的な顔立ち。

入学してから一週間の記憶をたどつてみる。

…ああ、そうだ。

この子とはたしか、同じクラスだ。

緊張のせいで、クラスのメンバーをよくみていなかつたからおぼろげにしか思いだせないけど、たしかそ

うだつた気がする。

「良かつた！んじゃ！」

男の子は私に背を向けて、運動場に向かつた。

私も制服についた砂を軽く払い、校門の方に向き直る。

「…あれ？？」

「んじゅ…

田の前にサッカーボールが転がっていた。

「これ… セッキはなかつたよくな…

そつとそれを拾い上げる。

もしかしてセッキの子が落としていつたんじや…！

私は慌てて運動場の方に向き直り、なんとか声が届きそうな距離にいた男の子の背中に向かつて声をかけた。

「あのつ…！」

精一杯声をだしたつもりだが、いまいち大きな声は出なかつた。

それでもなんとか男の子には届いたようだ。

彼は足を止めてこちらを振り返つた。

「ん？ オレ？？」

きょとんとして自分を人差し指でさしながら首をかしげる。

「これ… 違いますか…？？」

私はおずおずと男の子にボールを差し出した。

ぱっと男の子の顔が明るくなる。

「やつーなんか手がやみしいと思つたら、落としてたんかーー！」

男の子はすぐにかけよつてきて私の手からボールを受け取つた。

そして、

「ありがとうーーー！」

私にむかつて、にっこりと笑つた。

驚いて目を見張る。

それは私の16年間の人生の中ではじめてみた、

眩しいほどに明るい、太陽みたいな笑顔だつた。

プロローグ 菜ノ花side（後書き）

前投稿からだいぶあきました…

ので、新しい連載を始めます！

文章力もなく、へたな物語ですが、読んでいただけたらうれしいです

出会い 菜ノ花 side

「あつー昨日の子やーー！」

教室に入るなり、昨日の男の子が少し驚いたよつと書つた。

いきなりのことドビッシュといいかわからず、とりあえず小さく頭を下げる。

私が席につくと、彼は私の机に手をついてにっこりと笑いながら話かけてきた。

「同じクラスやつてんなあ！全然知らんかった！－てか、転校生！？」

「は、はい…一応…」

「やつぱりー…じゃあ今日転校してきたばつかやなー大変やと思つけど頑張りやー！」

「えつと…」

彼は全く悪気のない無垢な笑顔を私に向けている。

一応転校してきたのは2週間前なのだが…

まあ、こんなに地味で目立たない女の子なんて、いくら転校生でも覚えていなくて当然か。

バシッ！

私が頭の中で納得していると、突然女の子が彼の背中を叩いた。

「おまえは何失礼な」といつとんねん！この子は2週間前に転校してきた笹川さんやろ……」

男子は背中をさすりながら首をかしげた。

「え？？そ、うやつけ？？」

女子はため息をつくと、私に向かつて笑いかけた。

「『めんなあ。』いつがえらい失礼して。」

金髪にツインテールで、女の私でも思わずビキリとしてしまつようなす』く大人っぽくて美人な女子。

「い、いえ……そんな……」

私が首を振ると、女子は笑いながら手を横に振った。

「そんな緊張せんでもええで！あつ！ウチ、三浦恵美！遅くなつたけどよろしく！んで、ついでにこのアホは西崎光や！一応覚えといったつて……」

早口で話されたので驚きながらも女子がしてくれた自己紹介を整理する。

「え、えっと… 三浦さん、と西崎くんですね。」

私は女の子と男の子を順番に見て確認した。

「そんな名字にちゃんと付けなんかせんでもえつて… 恵美でええよ…」

女の子… 三浦さんは笑いつらつらとくれた。

「じゃあ… 恵美ちゃん? ?」

他の女の子を下の名前で呼んだのはこつぶりだひつへ？

緊張して、少し声が小さくなる。

「んつー… それでええよ…」

三浦さん… いや、恵美ちゃんは満足しつづなずこしてくれた。

「えー… じゃあオレも名前で呼んでやあ…」

突然西崎くんが割って入ってきた。

いや、女の子を下の名前で呼ぶのも緊張するのに… 男の子はひょつと…

「ええと…」

私が苦笑いで首をかしげていると、恵美ちゃんは西崎くんの肩をこづいた。

「 笹川さんの自己紹介のとき爆睡してたやつにそんなふうに読んで
もらえる資格があると思ってるんかおまえはーー！」

「 思つー。」

「 わつやな、おまえやつたら思つな。聞いたウチがアホやつた。」
「 あつー・わつじえぱオレ、そんとき夢の中でサッカーのショート決
めてたでー。」

「 何をどうや顔しとんねんー・ビリでもええわー。」

2人が言い争いを始めたのを見て、私は思わずくすりと笑った。

なんだる??:?

これは関西特有なのかな??

なんだかテレビの漫才を見ているみたい。

突然2人の言い争いが止まった。

あれ?

笑つてはいけない雰囲気だつたのだろうか??

私は慌ててペコリと頭をさげた。

「 ピー・ピーめんなさいー！笑つてしまつてー。」

「名前…」

私の謝罪に返事もせず、西崎くどがぼそりとつぶやいた。

「名前…なんやつけ??」

突然明るい顔で尋ねられて、私は戸惑いながら答えた。

「わ、筈川菜ノ花ですナビ…」

「んじゅ菜ノ花…！」

いきなり下の名前を呼び捨てで呼ばれた。

西崎くんにとっては普通なのかもしれないが、思わずびっくりしてしまった。

「よひしくな…！」

私はまた、西崎くんの顔に、

あの笑顔を見た。

出会い 菜ノ花 side (後書き)

タイトルは「出会い」にしましたが、光と菜ノ花はプロローグに一応出でていますね(; _ _)

まあ、今回は恵美との出会こと光とのありためでの出会ことついじで(*^__^*)

部活 菜ノ花side

あの日から恵美ちゃんや西崎くんが頻繁に私に話しかけてくれるようになった。

私も初めは緊張していたけど、少しずつ2人との会話に慣れるようになってきた。

そんなある日……

「菜ノ花は部活とかやれへんのー??」

突然恵美ちゃんに尋ねられた。

「部活…ですか??」

今まで部活には入ったことがない。

一応興味はあつたりするのだが……

なんとなく自分が入ってはいけない世界のような気がしていった。

「特に…考えてはいませんが…」

でも……

「…少し、興味はあります」

私はうつむきながら小さな声で答えた。

恵美ちゃんはそんな私を見てにっこりと笑う。

「じゃあ、今日の放課後一緒に運動場きてくれへん??紹介したい部活があるねん!!」

放課後、恵美ちゃんに連れられて私は運動場へ向かった。

「えっと…何の部活ですか…??

「あれ…！」

恵美ちゃんは元気よく運動場の真ん中の方を指差した。

そこでは何人かの生徒がふた組に分かれてボールを追いかけている。

あれは…

「サッカー部…ですか??」

「うん…まあ選手じゃなくてマネージャーの方やけど…！」

マネージャー…！

予想外の言葉が頭の中で大きく響いた。

「マ…マネージャーって…あの、暗黙の了解で美人しかなれないと…有名な、あのマネージャーですか??」

「いや、そんな大げさなんとかやつよーーー！」

け、けど…

私のイメージではそうとしか…

とても私のような地味な人間がなれるようなものではない気がします…

私が当惑していると、恵美ちゃんは手を横にふって笑った。

「そんな困った顔せんでも！別にやりたくなかったらやらんでもええし！ただ、サッカー部のマネージャーがウチしかおりんくて仕事が大変やから手伝つてほしいなつて思つただけやで！」

「えーーー恵美ちゃんしかいないんですか！？」

サッカー部のマネージャーといえば、結構な人気職だつたような気が…（以前の学校調べ）

「いや、募集者はいつもいるんやけど…みんな光と悠人目当てでやる気ないやつが多い」というか…」

恵美ちゃんはため息をついた。

西崎くん？？

ああ、そうだった。

そういうえば初めて西崎くんと出合ったとき、彼はサッカーボールを持っていた。

そうか、西崎くんもサッカー部なんだ。

「西崎くんって女の子に人気があるんですか??」

なんとなく私が尋ねると、恵美ちゃんは苦笑いした。

「んー…まあ、あいつは誰にでも愛想ふりまつとるからなあ…。それに…」

恵美ちゃんはふとグラウンドの方に目を移した。

つられて私もグラウンドへと目を移す。

「あいつ、サッカーめっちゃ上手やから

恵美ちゃんに言われて、私は西崎くんに焦点を合わせた。

ちょうど西崎くんがボールを持っているところだ。

前には4、5人の相手チーム。

西崎くんはボールを止めてじっと前をみると、突然動きだした。

そして軽々と相手役の選手をぬいて、シュートを決める。

「…す」「」

サッカーのことは全然わからないけど、なんとなくやつ思つた。

まわりの人々が西崎くんのまわりに集まつて、西崎くんを「さすいたり背中を叩いたりする。

西崎くんはその中心でいつものように明るく笑つていた。

「まあ、あんな感じやから、かつてこのとか思う女の方が多いみたいやなあ」

「やつなんですか…」

私が感心しながらあらためて西崎くんを眺めてみると、ふとひかりをみた彼と田が合つた。

「菜ノ花や！…」

西崎くんは運動場の端にいた私たちにも聞こえる程の大きな声で私の名前を呼ぶとこちらにかけよつてきた。

「どうしたん!? なんでおんのー??」

「ウチが誘つてん! 菜ノ花にマネージャーセーへんか? って

「マネージャー!」

西崎くんは田を輝かせると、私の手を握つた。

「…」

思わず笑みをこぼす。

「さあ西崎くんは全然『氣』にしていないことがわかった。

「やんーおー、菜ノ花こマネージャーやりて欲しいー。」

「…え？」

私は驚いて田を見張った。

今まで部活に入るのはずっと『氣』が引いていた。

まじでやマネージャーになるなど考えたこともなかった。

『なんでこなやつが入ってるんだ？』

他の人にやれ思われるのが怖くて。

でも西崎くんは私が部活に入るのを望んでくれている。

うれしくて、自然とほおがゆるんだ。

「…まーー。」

西崎くんがにこりと笑つ。

「やつたーんじゃ、やひよかへやなー。」

「ウチもめつちやうれしこわー、菜ノ花やつたら真面目にしてくれる
と思つしウチも楽に…」「恵美…！」

突然恵美ちゃんの言葉を低い声が遮った。

「げつ！悠人！」

恵美ちゃん後ろを振り向くと少し顔をしかめた。

「『げつ！』とはなんやねん！おまえ、マネージャーの仕事ほつまつて何をゆひひにしゃべつとるんや！」

私も後ろを振り向くと黒髪の男の子が腕組みをして恵美ちゃんを見下ろしていた。

切れ長の皿に整った鼻と口。

ずいぶんきれいな男の子だな…。

そう考へて、ふとさつき恵美ちゃんがサッカー部のマネージャー志望の大部分が西崎くんともう一人、

『悠人』という人を皿当てにしていると言つていたことを思い出した。

ところによれば、この男の子が『悠人』くん？？

「ゆひひよにしゃべつとるわけとかひやつわーおまえらがウチに無理なことぬしつけてくるから、仲間ふやかと黙つて勧誘してゐるやー。」

「ん…？？勧誘…？？？」

男の子は私の方を見た。

「ちゅー！」とはおまえがマネージャー希望か？？

「え、えっと… 希望どこつか…」

いきなり見つめられて緊張してしまい、おどおどと答へると、男の子はふいと私から視線を外した。

「まあええわ。とりあえず恵美借りるドー」

やつぱり恵美ちゃんのツインテールの片方をひっぱる。

「ちよー！ 悠人！ 離せつて！」

抵抗もむなしく、恵美ちゃんは連れていかれてしまった。

「…ええと、いいんですか？？」

私が畳然としながらつぶやくと、西崎くんはにこにこと笑しながら言った。

「…まー、恵美がゆーにつれていかれんのはいつものことやから」

「そうなんですかー？」

「… わいとくん？？ でしたよね？」

あの男の子はいつたゞついう人なんでしょうつか… ??

キーンピーンカーンピーン…

下校時間を告げるチャイムが鳴った。

「あー、もう帰る時間やな。んじゃあかえるか!」

「えつ……恵美ちゃんはいいんですか…?それに練習す…」

「ゆーじがきたって」とは練習も終わったゆーじや…恵美は…ゆーじがおるから大丈夫やろー!」

西崎くんはすっと立ち上がると私に向かって手をふった。

「じゃあ着替えてくるから待っててなー!」

「はーはー…」

私はさうなずくとじょそやつと西崎くんを見送った。

…つて、あれ??

『待つてて』つてことは『一緒に帰ろう』つてこと…だらつか。

私と…

一緒に帰ってくれるの…??

西崎くんは私のことを『友達』つて思ってくれてるのかな??

そう考えるだけでうれしかった。

今までそんなふうに思つてもられてると思える人があまりいなかつたから。

…とりあえず、帰り道ではそそつのないよつにがんばれ。

そう誓つて軽く右手でガツッポーズを作つていた時。

突然風が吹いて風が舞い上がつた。

「ひつーー！」

グラウンドの砂が舞い上がって眼鏡の間をぬい目の中に入った。

と、とりあえず洗わなければ…

そう思つて私はすぐ近くにあつた水道に向かつた。

なんとか砂をとりだして眼鏡をかけよつとしたとき、

びり…

近くで何かが動く気配がした。

「西崎くん…？？」

視界がぼんやりとしていて見えない。

私は眼鏡をかけよつとした…だが、いきなり両手をつかまれ、それ

を阻止される。

ぼんやりとした視界の中のすぐ近くに西崎くんの顔が見えた。

じつと私を凝視をしている。

「えつ…？？なんですか…？？」

突然のことで心臓がどきどきとする。

な、なんだろ「うへ？」

私の顔に何かついているのだらうか？？

西崎くんはしばらく私の顔を凝視したあと、大きくうなづいた。

「うん！」

そしてぱっと明るく笑う。

「菜ノ花は眼鏡とつてる方が可愛いなあ！！」

西崎くんの行動を見ていて気付いたことがある。

西崎くんは本当に何も考えずに「うへ」と言つたりしたつする。

わかつてこのに心臓が強くなつた。

「うへ」とて眼鏡没収やー明日からコンタクトなー」

西崎くんはそういって私の眼鏡を取り上げた。

：可愛いなんて言われたのは何年ぶりだろ？？

突然以前の学校でのこと、中学時代のことを思い出した。

『バス！』

クラスメイト達が口々に私にそんなふつた言葉を浴びせる。

人をあざけるような、嫌な笑顔。

けど、田の前の少年は純粋な笑顔で私のことを『可愛い』といつてくれた。

「…はい…！」

今日これから、さっそくコンタクトを買いに行こう。

私はそう誓い、大きくなづいた。

部活 菜ノ花side（後書き）

サッカーのことはあんまり詳しくないのでおかしな点があれば追及してほしいです（：—ー）

悠人登場ですよ！でもまだこの時点では菜ノ花は悠人の名前をはつきり知らないということです（*^__^*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607z/>

キミは太陽

2011年12月29日22時00分発行